

『日本名山図会』と浮世絵の風景表現

大久保純一

“Nihonmeizanze” and the Representation of Landscapes in Ukiyo-e

はじめに

- ①名所絵圖様の源泉としての『日本名山図会』
- ②国芳の武者絵・歴史画における『日本名山図会』
- ③芳年の武者絵・歴史画における『日本名山図会』
- ④山岳表現の絵手本としての『日本名山図会』
おわりに

【論文題目】

日本各地の名山を描いた谷文晁の『日本名山図会』は、江戸後期に数多く刊行された風景絵本の中でも屈指の名作である。同書の最大の特長は、写生にもとづき高いリアリティーを実現している点にあり、白雲や亜欧堂田善らがこの絵本にもとづいて風景画の制作もおこなっている。

歌川広重に代表されるように、浮世絵の分野では、写実性の高い風景絵本や名所図会の挿絵の圖様をもとに名所絵が制作されるることは珍しくなかった。このため、高リアリティで山岳風景を描いた『日本名山図会』も、当然、広重らの名所絵にその構図が取り入れられていると考えられる。しかしながら、初代広重の名所絵の中に『日本名山図会』の山の圖様が直接模倣されている例は多くはない。浮世絵で『日本名山図会』中の山の図が積極的に取り入れられているのは、むしろ武者絵や歴史画の分野である。歌川国芳の武者絵・歴史画の背景には、『日本名山図

会』に描かれた奇怪な形をした山々がしばしば描き込まれている。それらは、前景に描かれた物語の舞台とは地理的に無関係の山ばかりであり、あくまでも緊張感ある画面の雰囲気にふさわしい形状の山を選んでいる。国芳の弟子の大蘇芳年もまた、『日本名山図会』の山を武者絵・物語絵の背景に頻繁に流用しているが、彼の場合も、物語画面と背景の山とは地理的な関連性は無く、もっぱら造形的な観点でのみ山が選びとられている。

『日本名山図会』の山の形が、浮世絵の名所絵にそのまま流用されることはあるが、細い描線で山体を立体的にとらえる描写法は、広重の名所絵の山の描写に大きな影響を与えており、国芳・芳年らの武者絵の背景の山々にも同じことが指摘できる。同書の写生的な山の描写は、江戸末期の浮世絵の風景表現に大きな影響を与えているのである。